

報 告

第44回総会・第142回研修会 参加記

伊藤 友香

今年の総会・研修会は例年にも増して「人」がテーマだったように感じました。組織の在り方、病院図書館の担当者とは、など自分自身への反省も込めて改めて考えることができました。

『病院図書館の世界』を出版された奥出麻里氏と首藤佳子氏の対談方式で進行された総会記念企画は、永久保存版の内容でした。自分の仕事を見つめるヒントや、今後の目標を両手からあふれんばかりにいただくことができました。帰宅後、自分なりにまとめたキーワードを職場に大きく張り出し、くじけそうなとき迷えるときに助けられています。これからも病院図書館の世界の一員として、恥ずかしくないよう、励んでいこうと思っています。

研修会では今年も4人の方から報告がありました。お話を伺いながら私の頭の中には二つの言葉が浮かんでいました。

① 図書館は成長する有機体である

ご存知、ランガナタンの図書館五原則の一つです。昨日と同じ図書館ではダメなのです。時代と共に、利用者のニーズに合わせて変化しつづける必要があります。そういえば、ランガナタンの五原則自体も時代に沿った順序に変えた方がいいという報告*が2014年にありました。この柔軟な考えは病院図書館担当者に不可欠だと思います。図書館を成長させるには自分自身が成長し続けなくてはなりません。村上敦子氏の最後のスライドに書かれていた言葉は、まさにこのことを素直に表現している内容であり、全ての病院図書館担当者に当てはまる目標で

もあると思いました。ILLシステムも新たなスタートを迎えます。増田徹氏が紹介した「coimo」は私たち会員が育てていくものです。時代にあったシステムをみんなで力を合わせて作りあげていきたい、と夢が膨らみました。

② そこに「人」がいること

場所があり資料がある、というだけでは図書館は機能していないと同じです。オンラインジャーナルを導入したので担当者を解雇した、という病院があるようですが、それは大きな間違いです。司書が着任してから見違えるように資料や各ツールが利用され、生き生きと動き始めた図書館。藤原純子氏の報告は、担当者在る意味を浮き彫りにしてくれました。また、安井久見子氏の引継ぎの際の各提案は、独りよがりになってはならないという当たり前のことを気づかせてくれました。病院図書館に担当者が居続けられるよう、次の世代にうまく繋げることも現担当者の責務なのではないでしょうか。

それにしても、懇親会会場から見えた晴れわたった京都の空はどこまでも澄んでいて、心が洗われました。本当に素敵でした。そうそう、研修会の前日には、宣言通り天橋立に行っていました。生憎の空模様でしたが、雨ならではの見事な景観で感動の旅となりました。恒例の京都の旅は、私にとって、心身共にフル充電させてもらい、新年度へ向けての助走がスタートするタイミングでもあります。役員、会員のみなさまのおかげです。いつもありがとうございます。

* <http://current.ndl.go.jp/e1611>